全国の園長先生に無料でお届けしています

子どものよりよい育ちをともに考える

Benesse

これからの幼児教育

2024 Spring

春

特集

組織で積み上げる園と保護者のコミュニケーション

インタビュー

園全体がチームとなり保護者を支え、育てるコミュニケーションを

大阪教育大学教授 小崎恭弘

園の取り組み事例

三宅幼児園（奈良県・公営）

山王保育所（大阪府・公設置民営）

データ紹介

乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査

解説／白梅学園大学教授 福丸由佳

ベネッセ教育総合研究所

今号の写真［表紙 / 裏表紙 / 上］
◎山王保育所

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。

令和６年能登半島地震におきましては、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地の復興が進み、被災された皆様に１日も早く平穏な日々が訪れますことを、心よりお祈り申し上げます。

今号では、本誌の読者アンケートで多くのご要望をいただいた「保護者コミュニケーション」を特集しています。取材にご協力いただいた園では、先生方の業務負荷を減らす工夫を凝らしながら、それぞれの地域特性に合わせて、保護者との信頼関係を積み上げる努力を重ねられている様子が印象的でした。さらに、後半のデータ紹介でも、乳幼児の保護者に焦点をあて、変化する社会環境下で保護者が直面する現実や、必要な支援についての考察をご紹介しています。

ぜひ多くの先生方にお読みいただき、今後の園のあり方を考える際に、お役立ていただけることを願っています。

「これからの幼児教育」編集部

STAFF

編集発行人／野澤雄樹　発行所／（株）ベネッセコーポレーション
印刷製本／ TOPPAN 株式会社　監修／北野幸子（神戸大学大学院教授）
企画・制作／ ベネッセ教育総合研究所
編集協力／（有）ペンダコ、丹羽三千代、菊池健（mananico）、神田有希子
執筆協力／二宮良太　表紙 + 特集扉デザイン協力／へんな優
イラスト協力／中川視保子　撮影協力／菊池健（mananico）

CONTENTS

1 特集
組織で積み上げる 園と保護者のコミュニケーション

2 インタビュー
園全体がチームとなり 保護者を支え、育てるコミュニケーションを
大阪教育大学 教授 小崎恭弘

8 園の取り組み事例❶
細やかな家庭支援と発信力の強化で 子どもの育ちと保護者を支える
三宅幼児園（奈良県・公営）

12 園の取り組み事例❷
保護者に伝わりやすく、園内研修・業務の簡素化を 兼ねたドキュメンテーションを実現
山王保育所（大阪府・公設置民営）

16 データ紹介 「乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査」より
母親・父親の描く理想と 直面する現実、求める支援
白梅学園大学 教授 福丸由佳

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます。
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2024

組織で積み上げる園と保護者のコミュニケーション

保育者にとって、保護者との良好な関係づくりは、大切な仕事の1つです。少子化などのさまざまな社会状況の中で園に対する保護者のニーズも多様化し、対応のしかた次第では思いがけないトラブルに発展することもあります。保護者対応を個別の保育者のスキルに委ねるだけでは限界があり、組織として共有し、学び、積み重ねていくしくみづくりが不可欠です。

今号では識者の解説と2つの事例から、そのあり方を考えていきます。

Interview

園全体がチームとなり保護者を支え、育てるコミュニケーションを

大阪教育大学教育学部
健康安全教育系 教授
小崎恭弘先生（こざき・やすひろ）

専門は、保育学、児童福祉、子育て支援、父親支援。保育士として兵庫県西宮市の施設、保育所に 12 年間勤務。その後、関西学院大学大学院人間福祉研究科後期博士課程満期退学などを経て、現職。大阪教育大学附属天王寺小学校校長、NPO 法人ファザーリング･ジャパン顧問などを兼任。著書に『発達が気になる＆グレーゾーンの子どもを伸ばす声かけノート』（総合法令出版）など。

保護者と良好な関係を築きたいけれど、コミュニケーションがなかなかうまくいかない――。若手、ベテランにかかわらず、そうした苦手意識をもつ保育者は少なくないようです。保護者とともに子どもの育ちを支える協力関係を構築することは、保育の質を向上させ、地域の中で信頼される園をめざしていく上で欠かせません。これからの園に求められる保護者対応・保護者支援について、大阪教育大学の小崎恭弘先生にお話をうかがいました。

園の理念をわかりやすく発信して、保護者の理解と共感を得る

社会変化の影響により園に対する要望が多様化

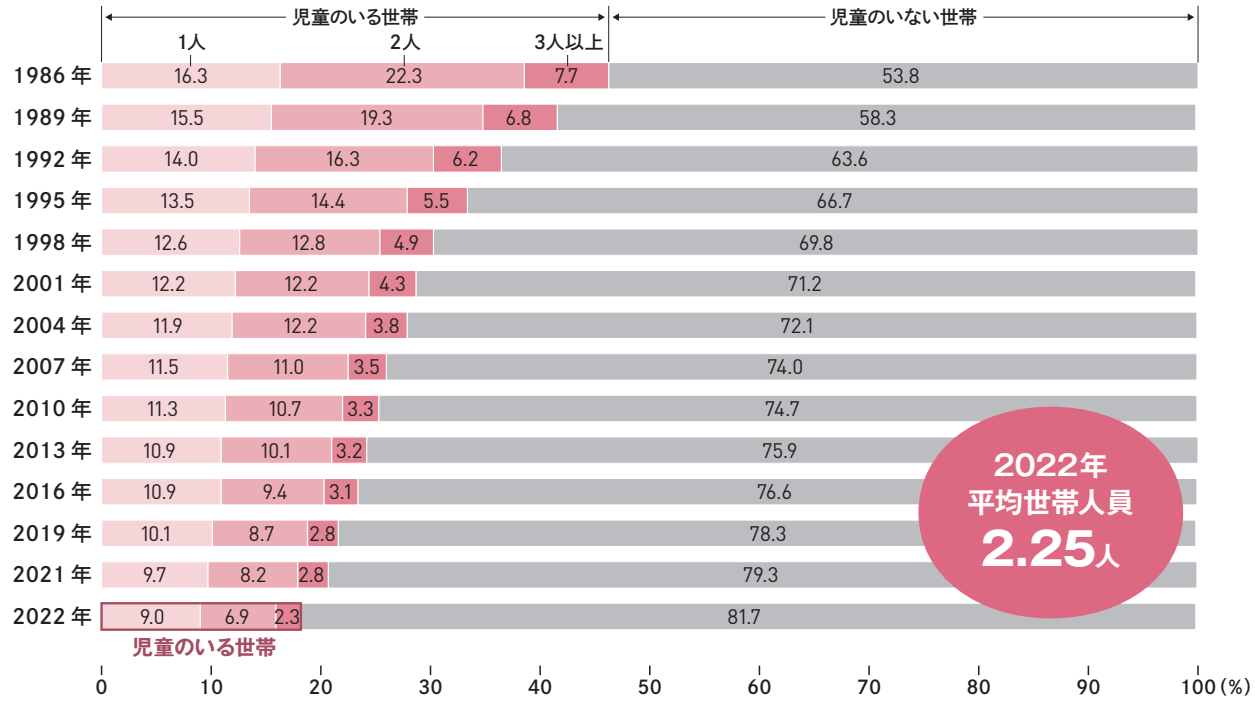
近年のさまざまな社会状況を受け、保護者との関係性が変化したと感じている保育者は多いのではないでしょうか。その大きな要因の１つに、保護者の養育力が弱まっていることが挙げられます。核家族化、少子化により、日本の家族機能は量的にも質的にも変化しました（図1）。特に量的な変化が顕著で、2022 年の平均世帯人員は2.25人です。３人家族であれば平均を上回る状況で、家族の構成人数が限られるため、育児や家事全般を父親・母親の別なくこなしていかなければなりません。質的な面でも、赤ちゃんを抱っこした経験がないまま親になる人も多いため、子どもへの接し方がわからないといった状況が見られます。

それでも隣近所に子どもが多く、支え合える関係性があれば、なんとかやっていけるのかもしれません。ところが、2022 年には、全世帯のうちの子どもがいる世帯がとうとう２割を切りました（図1）。1980 年代半ばに４割を超えていたことを考えると驚くべき減少率であり、今や子どものいる世帯はかなりの少数派です。加えて、社会の一部には子育てに不寛容なムードもあり、「泣き声が迷惑になるのではないか」「外で遊ばせる場所がない」といった保護者の悩みにもつながっています。

昨今は共働き世帯の増加により、園を利用する家庭が増えていますが、多くの家庭がそうした養育力の弱まりや社会的孤立に悩んでいることには注意が必要です。さらには一時期、課題であった待機児童数が激減し、保護者が園を選べる状況になったことで、園に対する要望も多くなっています（図2）。

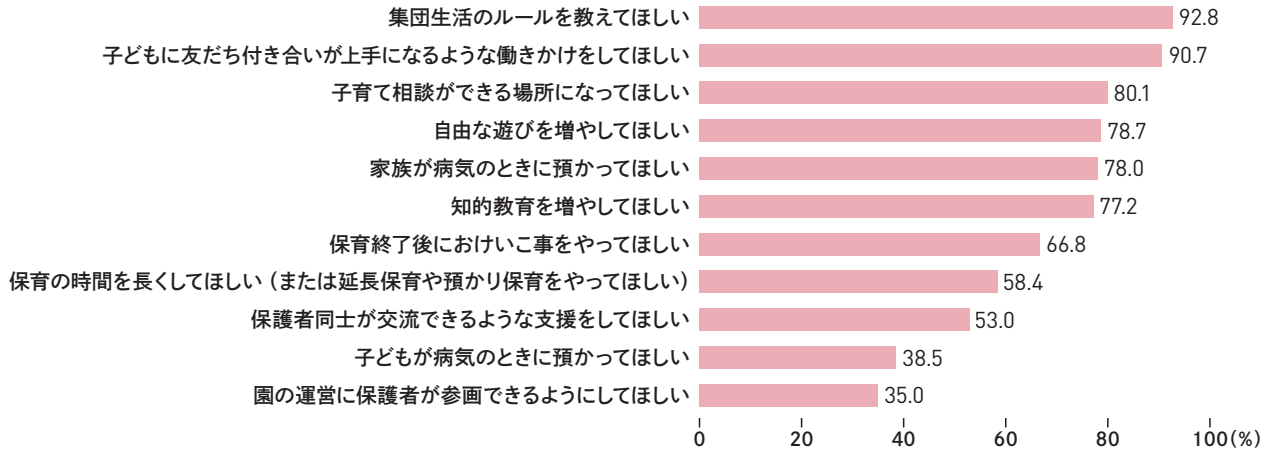
そして、社会全体の「コンビニ化」もまた、保護者の要望の拡大に拍車をかけていると私は考えています。コンビニエンスストアが日本各地で発

図1 児童の有（児童数）無の年次推移



※ 1995 年の数値は、兵庫県を除いたものである。 ※ 2016 年の数値は、熊本県を除いたものである。 ※ 2020 年は、調査を実施していない。
＊厚生労働省「国民生活基礎調査」（2022 年）より（※掲載の数値は四捨五入しているため、内訳の合計が「総数」に合わない場合がある。）

図2 保護者の園への要望（2022年）



※回答比率が高い順に掲載。 ※「とてもそう思う＋まあそう思う」の％。 ※子どもを園に通わせている人のみ回答。
＊ベネッセ教育総合研究所「第 6 回幼児の生活アンケート」（2022 年）より

展するにつれ、消費者はあらゆることにスピーディー・快適・安全なサービスを求めるようになりました。同様の考え方で、保護者は保育にも「便利なサービス」を求めているのです。しかし、当然ながら園はコンビニエンスストアではなく、園で行われる保育の本質はあくまでも子どもの最善の利益を追い求めることです。保護者のニーズを受け止めることは大切ですが、それを最優先にしてすべてに応えようとすると、本来あるべき保育とはかけ離れたものになってしまうでしょう。

保護者と良好な関係性を築き理解や共感を得る園になるためには

そうした社会状況に対して、この先、園はいかに向き合っていくべきでしょうか。私は、保護者

を支え、育てるという視点が基本になると考えています。

１、２歳からほぼ６割の子どもが園に通い、11時間という預かりの標準時間が認められる中、家庭で過ごす時間の多くが睡眠に充てられることを考えると、子どもの生活のベースは園だといっても過言ではありません。保育者は、園で多くの子どもと接する経験を通して一人ひとりを理解し、さまざまな状況に対応するといった保育の専門性を身につけています。まさに「保育のプロ」といえるでしょう。一方、保護者は、自分の子どもについてはだれよりも詳しい「わが子のプロ」です。多くの子どもを知る保育者が、その専門性に基づいて子どもへのかかわり方を保護者に伝え、それを家庭でも自分の子どもに合わせて意識してもらうといった、「保育のプロ」と「わが子のプロ」が理想的な協力体制を築いていくことが大切になるのです。

園と家庭の良好な関係性を築くためには、一定程度、保護者のニーズを聞きながらも、園の理念や子どもへの思いといった芯となる部分での信念をもち続けることが重要です。そういった大切なことを曲げることなく繰り返し発信し、コミュニケーションを重ねることで、保護者の理解は深まり、共感も高まっていくでしょう。

保護者への情報発信では、「翻訳する力」も求められます。保育者ならだれでも要領・指針＊に定められた「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」（以下、「10の姿」）を知っていますが、それをそのまま保護者に伝えても十分には理解されません。具体的な子どもの姿を通して、「こういう育ちを大事にしています」「こんな活動はしていません」など、わかりやすく発信することが必要です。みなさんも園の理念に基づく保育のねらいや内容について、保護者の理解が得られるように発信してきたかどうか、一度立ち止まって考えてみましょう。そうした発信が不十分だと、保護者は保育の専門性を理解せず、「ただ遊ばせているだけ」「安全を見守っているだけ」と捉えてしまうかもしれません。

今後、情報発信を始めとした保護者対応や保護者支援は、園の経営戦略においても極めて重要になります。園児確保の競争が激しくなる中で、「選ばれる園」となるためには、よりよい保育をめざすとともに、その実践内容をしっかりと保護者に伝えて共感を得ることが欠かせないのです。

園全体のチームによる対応で、保護者との信頼関係を構築する

ドキュメンテーションや連絡帳で保育のねらいや保育者の思いを発信

保護者に対して園の思いや取り組みを伝えるための具体的な方法を紹介していきましょう。

多くの園が取り入れているドキュメンテーションは、子どもの姿を通して園の考え方を効果的に発信できるツールの１つです。ドキュメンテーションでは、遊びや活動を通した子どもの姿や言葉を記録し、保育者が考察を加えて、どのような学びや育ちがあったかを可視化します。その中で、保育のねらいや保育者の思いも発信していきます。

ある園では、保育者の目に映った日常の小さな気づきを写真とともに紹介し、「10の姿」に基づく項目に関連づけて説明しています（**写真**）。また別の園では、「子どもの声や姿」「保育者の意図やかかわり」「発達に沿ったねらいや内容」をそれぞれ色分けして書き、日々の活動が育ちにつながっていることを伝えています。それらを見れば、子どもがただ遊んでいるのではなく、明確なねらいに基づく保育が展開されていることが、保護者にもしっかり伝わります。中には保護者に配慮して、全員が写っている写真を掲載するドキュメンテーションも散見されますが、保育のねらいや育ちを具体的に伝えるといった本来の目的からは外れるため、あまりこだわりすぎなくてよいでしょう。

＊要領・指針とは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

5歳児（かき組）	7月の活動内容（生活・あそび）　～ドキュメンテーションより～ 「お店屋さんごっこ」
保育士の思い	お買い物を遊びを通して、お金のやり取りを楽しもう

☆保育士の気づきレポート☆

お店屋さんごっこをしました。お金の準備では「先生、これが５０円で、これが１００円？」と確認しながら作っていたり、「１００円が３枚やから３００円や！」「○円より、○円の方が大きい。」と数字を比べる姿が見られました。ごっこ遊び中は、渡す金額やお釣りのやり取りに悩んでいましたが、「１５０円だから２００円出そうか。」「２００円をもらったら、お釣りは５０円だよ。」と伝えると、その後は子ども達で「このお釣りは○円だよ。」「○円はこれであってる？」と友だちと相談したり、「やった！お金ぴったり渡せた。」と、お買い物を楽しんでいました。これからも遊びを通して、身近にある色んな数字への興味関心を育んでいきます。

どんな所が育ったの？何にであったの？	健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
	思考力の芽生え	自然との関り・生命尊重	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現

次月（8月）保育のねらい	・友達との繋がりを深め、互いの思いを伝え合いながら遊びを進める

写真　保育者の日常の気づきを、「10の姿」に関連づけて説明したドキュメンテーション。年齢に応じて、0歳児は「3つの視点」、1・2歳児は「5領域」、3～5歳児は「10の姿」に関連づけています。
＊山王保育所（具体的な取り組みはP.12～15参照）の提供資料。

実際、保護者も初めはわが子を中心に見るのですが、続けるうちに、ほかの子どもの姿からも園の考え方を読み取ってくれるようになります。

保護者会で各年齢担当の保育者が、子どもの姿や育ちについてプレゼンテーションをする園もあります。動画などで保育の場面を見せ、「ここで子どもたちがおもちゃの取り合いをしていますが、こんな意味があります」などと発達に関する説明をします。具体的でとても伝わりやすい方法だと思います。

連絡帳も保護者との信頼関係を築く大切なツールの1つです。ところが、連絡帳の書き方を教わる機会はほとんどないため、保育者によって内容にばらつきがあることが少なくありません。保護者と1対1でやり取りする連絡帳は、留意点を踏まえて効果的に活用すると、保育者の思いを個別にわかりやすく届けることができます。そうした点を共有して、実際に保育者が連絡帳を書いてコメントを述べ合うような園内研修を実施してはいかがでしょうか（図3）。

図3　連絡帳・ノートを書く際の留意点と園内研修の方法

留意点

- **丁寧に書く（誤字・脱字を防ぐ）**
  丁寧な書き方が相手に伝わる
- **豊かな表現**
  イラストや擬音語・擬態語、絵文字などを活用する
- **個性的な子どもの姿**
  その子のオリジナルの感覚が表れる場面を選び、共感を呼ぶポイントを考える
- **子どものつぶやきを伝える**
  子どもの言葉や言い間違いなど、リアリティーを入れていく
- **誤解を防ぐ（マイナス面は書かない）**
  NGワードを意識し、意図が伝わりにくいことは書かない
- **双方向のコミュニケーション**
  やり取りや受け答えを意識し、一方的にならずに相手に伝わるようにする

園内研修の方法

1. 子ども1人につき、30秒間程度の動画を2本見る
2. 各保育者が、動画に関する内容で連絡帳を書く
3. 4人程度のグループになり、連絡帳を交換して、保護者としてのコメントを書く
4. グループ内でそれぞれの連絡帳を読み合い、いちばんよいものを選ぶ

＊小崎先生の提供資料と取材を基に編集部で作成。

保護者との信頼関係がトラブルを未然に防ぐ

保護者一人ひとりに対する日々のかかわりを通して、良好な人間関係を築いていくことも大切です。私は「人間関係の貯金」というイメージをもっていますが、日頃の会話などを通して信頼関係を深めていれば、少しのことではトラブルには発展しません。

保護者とのかかわり方を考える上で参考になるのが、「バイスティックの7つの原則」です（P.6 図4）。これは社会福祉学では広く知られた理論であり、現行の保育所保育指針「第4章 子育て支援」と重なる部分が多くあります。支援を提供する側とされる側においてこれらの原則が守られ

図4 バイスティックの7つの原則（対人関係の原則）

バイスティックの7つの原則は、アメリカの社会福祉学者であるフェリックス・P・バイスティックがケースワークの原則として記したものです。社会福祉の現場などで、支援される側との間に信頼関係を構築して、支援を成功に導くために実践されています。保護者対応や保護者支援においても大変参考になる理論です。

- **個別化**
  保護者が抱える問題は一人ひとりで異なります。目の前の1人の保護者に寄り添い、興味や関心をもちましょう
- **意図的な感情表出**
  保護者が自由に感情を表現できる場になるように心がけましょう。ネガティブな感情でも表に出してよいという雰囲気をつくります
- **統制された情緒関与**
  保護者の感情に飲み込まれずに、自分自身を冷静にコントロールすることを意識しましょう
- **受容**
  先入観をもったり否定したりせず、保護者の感情や態度をそのまま受け入れるように心がけましょう
- **非審判的態度**
  保護者の行動や言葉の善悪について判断せず、中立の立場で物事を捉えましょう
- **自己決定**
  保護者の意思を尊重して、自己決定できるように支援しましょう
- **秘密保持**
  保護者に関する情報や会話の内容は、本人の同意なく他人に漏らさないようにしましょう

＊小崎先生の提供資料と取材を基に編集部で作成。

ると、支援は成功しやすくなります。

いずれも大切な原則ですが、例えば「個別化」を考えると、保護者全体に発信するのではなく、目の前にいる１人の保護者に興味・関心をもって話しているという態度が伝わると、関係性は深まりやすくなります。また、社会福祉の現場でもっとも難しいといわれる「受容」を保護者支援の場面で考えると、仮に保護者がネガティブな感情や価値観を抱いていても、いったん否定せずに受け止めた上で、どうしたらよいかを一緒に考えていくことが大切になります。これらの原則の実践は決して簡単ではありませんが、保護者との関係づくりに役立つ内容なので、ぜひ園内研修などに取り入れてみてください。

保護者の考えと園の対応とのずれをなくしていく

次に、保護者と信頼関係を構築するための園の体制やルールづくりについて考えていきましょう。

一度のトラブルによって保護者との関係性が大きくこじれてしまうケースは、実はあまり多くありません。私は「スリーアウト理論」と呼んでいますが、園に対して不信や不満を抱く小さなできごとが積み重なって３度目くらいにそれらが表面化すると、トラブルに発展するといった状況が多いように思います。そのため、不信や不満を生じさせるようなことがあったら、その都度、丁寧に話を聞いて、解決していく姿勢が大切になります。

園に対する不信や不満は、保護者の考えと園の対応との間にずれが生じると起こりやすくなります。例えば低年齢児のクラスでは、かみつきによるトラブルが多発します。保護者にとっては、家庭では起こりづらいかみつきが安全であるはずの園で起こり、わが子が傷を負っているのを見たら、驚くのはしかたありません。しかし、言葉で気持ちを十分に表現できない年齢の子どもがそうした行動に出るのは、発達上、自然なことでもあります。年度の初めに保護者に子どもの発達の段階について伝え、「できる限り気をつけますが、起こりうることもご理解ください」といった説明をしておけば、反応は違ったものになるでしょう。

３歳児以降では、ケンカなど人間関係のトラブルが起こりやすくなります。それについても、「子どもたちはときにはぶつかり合いながら人間関係の築き方を学びます」などと事前に伝えておけば、保護者との間のずれを小さくできるはずです。

保育者間で対応が異なる場合にも、そうしたずれは生じやすくなります。例えば、かみつきがあったときに保護者に連絡するか、相手の名前を伝えるかといった方針が保育者により異なると、不信感につながる場合があります。きょうだいがいる家庭では、「上の子どものときは説明があったのに、なぜ今回は連絡がないのか」と思わせてしまうこともあるでしょう。

どの問題にだれが対応するか園内のルールを定めておく

園内のさまざまなリスクを点検し、保護者対応に関するルールを細かく定めて共有することで、クレームなどにつながるケースは減少します。

例えば、だれがどのように対応するかもルールが必要です。保護者から園へは、日常的なやり取りから用件、相談、要望、訴え、クレーム、抗議などさまざまなレベルの連絡があり、園側は、担任（個人または複数）、管理職、担任と管理職、職員集団などが対応します。日常のちょっとした相談であれば担任が保育室などで気軽に話を聞く形が考えられますが、深刻な訴えのときは管理職が面接室などで対応したほうがよい場合もあります。

また、担任が聞いた話をだれにどこまで報告するかもポイントになります。話の内容によってはすべてを管理職に報告する必要はないと考えますが、それも含めてルール化しておくと、保育者によるぶれを防げます。その際、「あまりにもひどいトラブルのときは園長に報告しましょう」といった抽象的な形ではなく、何回以上続いた場合か、1回であっても電話等で何分間以上話した場合かなど、どこからをひどいトラブルと考えるかを、できるだけ具体的にしておくとよいでしょう。

園として「いつ」「どこで」「だれが」「どのように」対応するかは園側でコントロールできる事柄です。それらをきちんと定めて対応のバリエーションを増やし、園全体でチームとして対応する体制を整えていくことが大切になると考えています。

保育者がチームとして動くことで保護者の満足度を高める

保護者対応では、ネグレクトや虐待が疑われるケースへの対応も避けて通れません。大原則として、緊急性の高い状況を発見したら、ためらわずに関係機関に報告してください。

また、緊急性は高くないにしても、気になるケースはあると思います。そうした場合に指針となるのが、「児童福祉法」「児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）」などの法律です。2019年の法改正では、子どものしつけに際して親権者らが体罰を加えることが禁止されましたし、2022年には民法からも、しつけのために「懲戒」できるという表現が削除されました。さらに児童虐待を発見した場合は、すべての国民に通告する義務が課せられています。これらの法律について保護者に説明して正しい知識を広めるとともに、園としても必要なときには通告を行うと伝えておくことが大切です。

これまで保育の現場では、リーダーとなる保育者が計画や準備、実践、振り返り、保護者対応までのすべてを取りしきるケースが多かったと思います。しかし、保育の長時間化や対応すべき課題の多様化などにより、今後はチームで動くことがより大切になっていきます。保護者対応や保護者支援においても、園がチームとして動くことで、個々の保育者の負担を減らしながら保護者の満足度を高めやすくなる、と考えています。

保育者のみなさんへのメッセージ

保育が子育て支援を重視するようになった根底には、現代日本における子育て文化の弱体化があります。子どもや子育てには社会的に大きな意義があるという、共通の価値観が軽んじられているのです。子どもは人と人とをつなぎます。そして、そうした子どもの力を地域に還元していくことで、社会もまた発展していきます。今や社会インフラである保育に携わるみなさんは、子育て文化を守り、つくり上げていく存在であることに自信と誇りをもち、子どもを大事にできる社会の実現に力を尽くしていただきたいと思います。

園の取り組み事例 ❶

三宅町立三宅幼児園（奈良県・公営）

細やかな家庭支援と発信力の強化で子どもの育ちと保護者を支える

取り組みのポイント

- 日常の家庭支援や会話を通して関係性を深め、「一緒に子育てをしていきましょう」というメッセージを伝えて、保護者の精神的な支えとなることを心がける。
- ドキュメンテーションや動画配信を通して、日々の保育や行事のねらい、子どもの育ちなどを共有し、保護者と目線を合わせる。

保護者の悩みや不安に寄り添いながら、共に子育てをする

町ぐるみで子育てをする一体感の一方で、距離感が近いゆえの難しさも

野球のグローブの生産地である奈良県磯城郡（しきぐん）三宅町は県北西部に位置し、人口約6,500人、面積約4㎢という自治体です（2023年10月時点）。三宅町立三宅幼児園は町にある唯一の認定こども園。町にはほかに0～2歳児を対象とした小規模な保育施設はありますが、町内の子どもの多くが三宅幼児園に通います。町の小学校も1校だけのため、子どもたちはほぼ同じ顔ぶれで育っていきます。

三宅町健康こども局の局長で、2023年度は同園の園長を兼任する植村恵美先生は、保護者を取り巻く状況について次のように説明します。

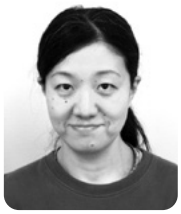
「子どもの数が少ないこともあり、行政は妊娠中から個々の保護者の子育てを支えています。出産後は健康こども課の保健師、その後入園児の保護者には本園を始めとした保育施設、また、未就園児の保護者には町の子育て包括支援センターが、中心となってサポートします。そのように町全体で一体感をもった子育てができる半面、人間関係が固定化しやすく、いったん関係がこじれると修復に時間がかかるといった難しさもあります」

そうした状況を踏まえ、かねてより同園では保護者一人ひとりと向き合い、よい関係をつくることを心がけてきました。

お話ししてくださった先生方

園長
植村恵美先生

家庭支援担当
大濱幸枝先生



「家庭支援」専任の保育者が担任とタッグを組んでサポート

同園で保護者を支えるしくみの1つが、家庭支援推進保育士の存在です。それぞれの保護者が抱

える悩みや不安に対応するため、専任で家庭支援を担当する保育者を置き、個別の生活環境を把握した上で相談に乗るなど、手厚いサポート体制を敷いています。

「町内唯一の公立認定こども園という性格上、本園にはさまざまなタイプの保護者が集まります。それぞれの子育てに関する困りごとに寄り添いながら、園の方針を理解していただき、保護者にも成長していただくという、いわゆる『親育ち』をサポートする役割を果たしていきたいと考えています」（植村園長）

2022年度より家庭支援推進保育士を務めている大濱幸枝先生は、近年の保護者の傾向について次のように話します。

「核家族化が進み、特にここ数年はコロナ禍の影響で子育てを通じた交流の場が減ったため、目の前のわが子しか知らない保護者が増えていると感じます。そうした環境で育児をしていると、『子育てのしかたがわからない』『発達が遅れているのではないか』といった不安や心配を抱え込み、インターネットで得た情報をうのみにすることも少なくないようです」

子育てに悩んでいたり、家庭環境に課題があったりなど、さまざまな要因で支援を必要とする保護者の存在には、日常的に接している担任が気づくケースがほとんどです。初めは担任がサポートしますが、状況が改善しない場合は大濱先生も入って面談を行います。そして、保護者の状況に応じて、子どもの育ちや様子について伝えたり、家庭での接し方のアドバイスをしたりします。家庭での実践が難しい保護者には、園でやってみたときの子どもの姿を伝え、少しずつでも家庭で取り組んでもらえるようにサポートします。そうして、「一緒に子育てをしていきましょう」というメッセージを伝えています。

「保護者にとって家庭支援推進保育士は、担任とは異なる立場だからこそ話せることもあり、必要なポジションだと感じています。担任とも密に連携をとり、保護者の精神的な支えとなることをめざしていきたいと思います」（大濱先生）

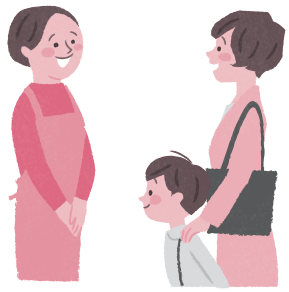
園内の療育教室で保護者を含めた連携がスムーズに

同園では、発達に気になる点のある子どもと保護者への支援にも力を注いできました。その中心となる取り組みが、15年ほど前から実施している「療育教室」です。以前は町外に開設されている通所施設へ、親子通園として保護者同伴で通うことしかできませんでした。しかし、「仕事があるので参加しづらい」「施設が遠くて、子どもを連れて行くのが大変」といった悩みをもつ保護者が多く、園内に教室を開設することにしたのです。

「保育を通して『言葉の発達が遅れている』『友だちとのかかわりが難しい』といった課題が見られる場合、保護者との個人面談で家庭での様子や困りごとをお聞きします。そして、必要に応じて町の公認心理師による発達検査を受けていただき、療育教室への参加が望ましい場合にご案内しています」（植村園長）

療育教室は、週1回、対象となる子どもが保育時間中に別プログラムとして参加し、保育者や公認心理師、作業療法士などが協働して、さまざまな発達支援を行います。通常、保護者は参加しませんが、学期に1回、参観と懇談会を実施しています。園内で療育教室を実施する何よりの利点は、日常的に子どもと接する保育者と各専門職、さらには保護者との情報共有がスムーズになり、一人ひとりに合わせた支援を行いやすい上、その後の変化も園と家庭の両面から捉えられることです。また、各保育者も、支援をする中で発達に関する専門的な知識を身につけていきます。

「常に保護者と目線を合わせた発達支援を行い、家庭での接し方についても専門スタッフを中心にアドバイスします。こうした支援を通じて、保護者が1人で悩みを抱え込むケースをできるだけ減らしたいと考えています」（植村園長）



保護者と保育のねらいを共有し、子どもの主体性を育てたい

定期的な園内研修をきっかけに情報発信の方法を強化

保護者支援として細やかな取り組みをしてきた同園ですが、保護者との関係性をさらに進めるきっかけとなったのが、2021年に大阪教育大学の小崎恭弘先生が代表を務める一般社団法人NECQA（保育士と保育の質に関する研究会）から講師を招き、定期的に園内研修を行うようになったことです。同園では子どもの思いや興味に寄り添って主体性を伸ばす保育を大切にしてきましたが、これまでは保育者が自ら考えて動くというよりも、管理職が決めた方針に則ることを第一に保育を実施していたことに課題がありました。

「子どもの主体性を伸ばすのなら、先生方も主体的に保育に取り組んでいく必要があると考え、そういった方針のもとで園内研修を行うようにしました。すると、研修で環境設定のしかたや、ドキュメンテーションによる保護者との共有方法などを学ぶ中で、先生方はそれらを保育にどのように取り入れて生かせばよいか、自ら考え、構成していくようになりました。先生方が変化する中で、子どもにもまた、自分で遊びを見つけて深めていく力が育ちつつあります。そうした姿を保護者にも積極的に発信する方法を工夫して、『一緒に子どもの主体性を育んでいきましょう』というメッセージを送っています」（植村園長）

現在は、日常的な子どもの姿を伝えるために、ドキュメンテーションと保育動画の配信という2つの方法を取り入れています。

ドキュメンテーションは以前より作っていましたが、定期的な園内研修を始めた時期からは、子どもの主体性が発揮された場面を意識して取り上げるようにしています。写真を多めに掲載するとともに、子どものつぶやきや思いなどのコメントを入れて構成します。作成にかかる負担が大きくならないよう、頻度は保育者に任せており、各クラスは月1回ほどのペースで発信しています。

写真　作品展では「紙」を素材に、各年齢の子どもたちの作品とともに、その背後にある育ちを伝えるドキュメンテーションを掲示しました。写真は、1歳児と2歳児のドキュメンテーション。紙粘土そのものを楽しんでいた1歳児が、2歳児になると自分なりの作品を作るようになるという、子どもの発達の様子を保護者に伝えています。

子どもの発達を伝える作品展で保護者の理解を深める

園行事を通した子どもの育ちも、ドキュメンテーションを通じて効果的に伝えています。同園には毎年11月に保護者を招いて子どもの作品を見せる作品展があります。2023年度の作品展では、子どもの発達の様子を保護者に伝えたいという保育者の発案で、すべての年齢で「紙」という同じ素材をベースに作品を作ることにしました。０～２歳児は紙粘土、３～５歳児は段ボールなども使って、年齢ごとにどんなことができるかがわかる作品を展示。さらに、子どもが作品に向き合う姿、保育者が感じた子どもの育ちなどを発信するドキュメンテーションを作りました(**写真**)。ドキュメンテーションには、０～２歳児は保育者の感じる子どもの思いを記し、３～５歳児はクラスごとに活動のポイントや子どもの姿をまとめています。それを作品とともに掲示し、ぐるりと一周すると、０歳から５歳までの発達がわかるように配置しました。

「保護者はわが子を見て、『〇歳だから、これができないとおかしいのだろうか』などと不安を感じてしまうことがあります。この作品展では、『各年齢で何ができるのかがよくわかった』という保護者の発言が聞かれるなど、発達に関する理解が深まる様子が見られました」(植村園長)

気軽に見られる動画を配信し保護者と目線を合わせる

子どもの姿を共有するために、2022年度から動画の配信も始めました。園向けの業務支援ツールの動画配信機能を活用し、月に１～２回、クラスごとに届けています。水遊びや落ち葉遊びなど、季節のテーマを大切にした遊びや活動の場面を中心に取り上げており、保育のねらいや子どもの姿について説明する文章も添えています。

「お迎えが遅い時間帯になる保護者は、ドキュメンテーションをゆっくり見られなかったり、掲示している教室まで足を運べなかったりすることがあります。業務支援ツールは、保護者が日常的に目を通す事務連絡などにも使っているため、動画も気軽に視聴してくれています」(植村園長)

子どもの主体性を伸ばす保育は、保護者には遊んでいるだけのように見えることもあります。ドキュメンテーションや動画を通して、子どもの姿とともに保育者の考えを共有することで、さまざまな遊びや活動に明確な計画やねらいがあることが伝わりやすくなりました。最近では、園の活動に関連する工作を家庭でも作ってみたと保護者が教えてくれるなど、少しずつ保護者と園が同じ方向を向いて子どもにかかわるようになっています。

保護者への情報発信に力を入れるようになり、保育の質の向上がもたらされるという好循環も生まれています。

「保護者への説明を意識して、先生方が一人ひとりを丁寧に見取り、成長を支えられるようになりました。先生同士が子どもの姿や育ちについて、活発に語り合うようにもなっています」(植村園長)

こうしたさまざまな取り組みの土台として、日々しっかりと保護者と向き合い、会話をすることの大切さを痛感していると、植村園長は話します。

「保護者はそれぞれ異なる生活環境や背景を抱えており、同じ言葉で伝えても、理解していただけない場合もあります。私たちの価値観や考え方を押しつけるのではなく、まずは保護者のありのままの思いや意見に耳を傾けることから、すべてが始まるのだと思います。そして、園として何ができるのか、どう寄り添えるのかを考えて会話を交わしていくことで、少しずつ保護者との関係性は深まっていきます。まさに私たちの価値観の多様性、柔軟性が問われていると思います」

幼保連携型認定こども園 三宅町立三宅幼児園

子どもが興味や思いに沿って遊びを深める時間を大切にして、主体性を伸ばす保育を展開している。週１回、園内で療育教室を実施し、対象となる子どもの発達支援を行っている。

◎ **園　長**：植村恵美先生
◎ **所在地**：奈良県磯城郡三宅町伴堂 703-1
◎ **園児数**：190人(2024年２月時点)

園の取り組み事例 ❷

大阪市立 山王保育所（大阪府・公設置民営）

保護者に伝わりやすく、園内研修・業務の簡素化を兼ねたドキュメンテーションを実現

取り組みのポイント

- 近年急増する外国籍の保護者にも伝わりやすいように、動画配信を取り入れたドキュメンテーションを作成。子どもの育ちを捉えて発信する作成過程を、園内研修と兼ねる。
- 1年間を通して、クラスごとに1日に2組限定で保護者の保育参加を受け入れ、保育者の思いや子どもの姿を共有する。

だれに対しても伝わりやすいドキュメンテーションを追求

外国籍の子どもが増え保護者との意思疎通が課題に

大阪市立山王保育所は1963年に開園後、約半世紀がたった2012年より社会福祉法人白鳩会が委託運営を行っています。同園では近年、中国やベトナムを中心とした外国籍の子どもが急増し、全園児の35%以上に達しています。外国籍の子どもは、日本語をある程度話せる子どももいれば、来日したばかりの子どももいるなど、状況はさまざまです。言葉でのコミュニケーションが難しい場合でも、子ども同士はすぐに仲よくなり、保育者もジェスチャーなどを交えて子どもと意思疎通を図っているため、保育に大きな支障はありません。

一方で、難しさを感じているのが保護者とのコミュニケーションです。保護者の中には日本語をほとんど話せない、あるいは会話はできても文字が読めない人もいます。そのため、おたよりや口頭で園の予定を説明しても、伝わらないことがよくありました。例えば遠足では、自国にお弁当の文化がないため、お弁当箱の中にお菓子だけを詰めて登園してくる子どももいました。そうしたことから、同園では中国籍とベトナム籍の保育者をそれぞれ採用。保護者との会話の通訳や電話連絡の代行をお願いして、意思疎通を図っています。

お話ししてくださった先生方

園長
武藤英嗣朗先生

主任
松田沙弓先生

副主任
竹内由喜恵先生

活字離れなども踏まえて情報発信のあり方を再考

それでも日常的なコミュニケーションの取りづ

らさは残り、園長の武藤英嗣朗先生は、特に子どもの育ちを共有することに課題を感じていると話します。

「大切な話のときは通訳を入れますが、通訳を入れるほどではない『子どもたちはこんな遊びをしていますよ』といったなにげない会話から保護者との関係性が深まり、子どもの育つ姿が伝わることも多いものです。そうした実は大切な意味をもつ日常的なやり取りが難しいと感じていました」

また、武藤園長は外国籍の子どもの増加とは別の要因でも、保護者とのコミュニケーションのあり方を考え直す必要性を感じていました。

「以前は毎月の園の活動を文字が主体のおたよりで発信していましたが、若い世代の活字離れが進んで内容がうまく伝わらないばかりか、目を通していただけないこともありました。そのため、10年ほど前から写真を交えるようにはしていましたが、十分とはいえず、もっと伝わりやすくする工夫が必要だと思っていました」（武藤園長）

そうした課題意識に加え、コロナ禍で保護者と対面する機会が減少したこともきっかけとなり、毎日及び毎月作っていたドキュメンテーションを、2021年から見直すことにしました。

動画を組み込んだ ドキュメンテーションを作成

ドキュメンテーションの見直しにあたり、武藤園長と保育者は「保護者が知りたい内容とは？」「日本語がわからない保護者にも伝わりやすくするには？」などの議論を重ねて、文字フォントにまでこだわったフォーマットを、基本的なオフィスソフトを用いて作成しました。こうして写真とコメントを中心とした構成で、動画共有サイトでの動画配信も活用したドキュメンテーションの方向性が固まりました。

ドキュメンテーションはクラスごとに作成しており、「今日の１場面」として、その日の保育のハイライトを紹介（**写真１**）。その活動がどのような思いで行われ、どういった育ちにつながるのかを

写真１　毎日のドキュメンテーションでは、写真とともに、子どものつぶやきや思いをコメントとして掲載。つぶやき以外にも、発語のない子どもの思い、保育者の言葉、状況の説明などを、異なる吹き出しで表します。

発信しています。フォーマットをもとに当日の写真をあてはめて、吹き出しにコメントを書き入れるだけなので、毎日作成する負担感はあまりないといいます。実際に保育者は、午睡の時間などに20分ほどで作っています。そうしてできあがったドキュメンテーションは、保護者の目に入りやすいエントランス近くの廊下に並べて掲示します。

毎月のドキュメンテーションもまた、毎日作成したものをベースとするため、ほとんど手間がかかりません。毎日のドキュメンテーションの中から、子どもの育ちがもっとも伝わりやすい１枚をセレクトし、「保育士の気づきレポート」として保育者による振り返りを書き加えます（P.5 **写真**参照）。さらに、保護者からの要望が多い食育に関してまとめたページを加えて、「おたより」として発信しています。

限定公開の保育動画は、週１回、クラスごとに作成します。ドキュメンテーションに二次元コードを掲載して、スマートフォンなどで手軽にアク

セスできるようにしました。

「１回の動画は長くても３分程度です。よいシーンはねらって撮れるわけではありませんし、撮影が大変になりすぎないよう、子どものありのままの姿を伝えようと話しています。編集をする必要はないとも話していますが、若い保育者は慣れているようで、手早く編集をして配信するスキルには驚かされます」（武藤園長）

動画のよさは、家庭で話題に上るきっかけになることです。一緒に視聴していた子どもが「このときこんなことがあったよ」と言って会話が広がることも多く、中には母国で暮らす祖父母に送って、子どもの姿を共有している家庭もあるといいます（動画の限定公開は事前に全保護者が了承済み）。

子どもの育ちを捉えて発信する過程に、園内研修の役割をもたせる

できごとの報告だけでなく保育の専門的な視点から伝える

園の実践で注目したいのは、ドキュメンテーションを情報発信の手段として活用するだけでなく、園内研修としての役割ももたせていることです。

「保護者への情報発信以外にも、園内研修を充実させて保育の質を高めたいということをずっと課題に感じてきました。しかし、日々の業務に加えて新たな取り組みを始めると、さらに負担感が増してしまいます。そこで、新しいドキュメンテーション作りが、一人ひとりの保育者の専門性を高める園内研修としてのしくみを兼ねるようにしました」（武藤園長）

ドキュメンテーションで伝える内容は、「その日のできごと」「子どものかわいかった姿」といった報告にとどまらず、保育者の専門的な視点から子どもの姿を捉えることを意識するようにしました。そうした視点を養うために、週１回、クラスごとに担任が集まって子どもについて語り合うミーティングを設定。ミーティングでは、保育所保育指針の解説書を参照しながら、「３つの視点」「５領域」「10の姿」が目の前の子どもたちにどう表れていたかなどを話し合います。主任の松田沙弓先生は次のように話します。

「本園は複数担任制なので、各担任の視点から『〇〇さんは、最近こんなことに困っている』『△△さんにはこんな成長が見られる』などの気づいたことを出し合って、クラス内で情報共有を行います。さらに、今月のクラス全体の育ちを振り返り、毎月のおたよりとして発信するドキュメンテーションをどれにするかを話し合います。こうした話し合いの成果で、保育のねらいを意識しながら遊びや活動をサポートする姿勢が、先生方に身についてきたと感じています」

話し合いに基づき、保育者は日々の保育で捉えた子どもの姿を、保護者とドキュメンテーションで共有しています。

「『園内研修の中身をそのまま保護者にお伝えしている』と言っても過言ではありません。とはいえ、専門的な内容は伝わりづらいので、子どもの育ちの観点は『どんな所が育ったの？』『何にであったの？』と言い換えるなどの工夫をしています」（武藤園長）

毎日、保育者が作りためているドキュメンテーションは、いずれ「『10の姿』の事例集」のような形でまとめたいと、武藤園長は考えています。

各クラス1日2組限定で保護者の保育参加を受け入れる

園の理念や保育の内容などを理解してもらう上で、2021年から実施する保護者による保育参加「保育を楽しむ日」も、大きな役割を果たしています。以前は、大勢の保護者が一斉に保育に参加する保育ウィークなどを実施していましたが、「保育を楽しむ日」では各クラス１日２組までに限定。保育室の入り口に２か月分の予定表を貼って希望日を

記入してもらい、１年を通して受け入れています。

「特別なイベントではなく、日常の子どもの姿を知ってほしいというねらいで始めました。参加人数を絞ることで子どもは普段通りにふるまえますし、保護者も主体的に行動することができます。保護者にはわが子以外のさまざまな子どもと接して、子育ての楽しさや保育者の思いなどにも気づいてほしいと考えています」（武藤園長）

保護者が参加するのは登園時からお昼前まで。その間は自由に動いてよく、子どもと一緒に遊んだり、保育者の側に入って保育の手伝いをしたりなど、思い思いの様子が見られます（**写真２**）。初めはわが子ばかりを見ていた保護者も、次第に全体を見渡して、ほかの子どもとも接するようになっていきます。また、参加した保護者には、自由に選んだ１冊の絵本での読み聞かせを依頼。子どもにとって普段とは違った読み聞かせが楽しく、保護者にとっても保育に参加した実感がもてる体験となっています。ベトナム出身の保護者がベトナム語の絵本の読み聞かせをしたときには、子どもたちは異文化を感じ、目を輝かせて聞き入っていたといいます。保護者の活動の終了後には保育者との懇談の場を設定。その日の感想を聞くだけでなく、１年を通した保育の流れや子どもの姿などを説明する機会としています。

「保育を楽しむ日」は非常に好評で、年間で９割以上の保護者が参加し、複数回参加する保護者もいます。現在はほぼ毎日、どこかのクラスに保護者が入っていることが自然な光景になりました。副主任の竹内由喜恵先生は次のように話します。

「私たちにとっても、常に保護者がいることが当たり前になり、いつもの保育を見てもらおうという姿勢になりました。そうした雰囲気の中で参加する保護者もまた、私たちの子どもへの声かけや、園で使っている食器などの道具を見て、ご自身の育児のヒントにされることもあるようです」

写真２　９割以上の保護者が参加するという「保育を楽しむ日」。保護者にとって保育のねらいなどを知るとともに、自分の子どもが集団の中でどう過ごしているかなど、普段は見られない子どもの姿に気づくきっかけになります（左手前の女性が保護者）。

保育参加を体験した保護者の多くは園の思いを理解して協力的になり、保育者とのコミュニケーションもスムーズになっていきます。

保護者との関係づくりを進めつつ、保育の質を高めていく取り組みは、「やっと形ができてきた」段階だといいます。これからも新たなチャレンジをしていきたいと、武藤園長は意気込みを語ります。

「本園が委託運営に切り替わった直後は、保育の様子が保護者に見えなかったため、多くの戸惑いの声があったと聞いています。そこから少しずつ改善を重ね、一つひとつの取り組みが線としてつながってきた結果、今、いわゆるクレームはほぼなくなりました。これからも、本園が理念に掲げる『子ども同士認め合い、助け合い、励まし合い、学び合う』保育の実現に向けて、取り組みを充実させていきたいと考えています。何かをイチから始めるのは大変なので、既存の取り組みにどうすれば付加価値をプラスできるか、同時にどうすれば業務を簡素化できるかを考える。そして、全員の同意が得られなくても、まずはカタチにして、共感してくれる人を探し、少しずつでも進めていく。そうやって、チャレンジを続けていきます」

大阪市立
山王保育所

国際色豊かな仲間たちと出会い、多様な文化や価値観に触れながら成長していく保育を重視。サッカー教室や運動遊び、絵画など、多様な教育・保育プログラムを展開している。

◎ **園　長**：武藤英嗣朗先生
◎ **所在地**：大阪府大阪市西成区山王 1-6-10
◎ **園児数**：97人（2024年 2月時点）

「乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査」（2023年３月実施）より

母親・父親の描く理想と直面する現実、求める支援

ベネッセ教育総合研究所は、国内に住む０～６歳（未就学児）の第一子をもつ母親・父親を対象に、「乳幼児の保護者のライフキャリア*と子育てに関する調査」を実施しました。現代の保護者のライフキャリアの捉え方、子育てやキャリアの悩みなどについて調査から見えてきたことを、調査協力者である白梅学園大学の福丸由佳先生にうかがいました。

＊ライフキャリアとは、職業生活だけでなく、人生・生き方・個人の生活全般における役割を視野に入れた広義のキャリアのこと。本調査では、乳幼児の保護者世代の主要な役割として「親」「家庭人」「職業人」「個人」を取り上げた。

福丸由佳先生（ふくまる・ゆか）

白梅学園大学子ども学部発達臨床学科教授。聖徳大学人文学部専任講師、米国シンシナティ子ども病院研究員などを経て 2009 年より現職。専門は臨床心理学、家族心理学。子育て支援や離婚を経験した家族への支援などが現在の研究テーマ。編著書に『離婚を経験する親子を支える心理教育プログラム FAIT―ファイト―』（新曜社）、『子ども家庭支援の心理学』（共編著、北大路書房）、『発達の理解と保育の課題』（分担執筆、同文書院）など。

母親と父親の役割意識と実際の役割分担

本調査では少子化や共働き世帯の増加といった社会環境の中、他者とのかかわりが制限されたコロナ禍を経て、乳幼児をもつ保護者のライフキャリアや子育てにどのような傾向が見られるかを探っています。子育てがスタートしたばかりの親にとっては、当然、手探りはつきものでしょう。今回の調査結果にも、母親・父親として、あるいは職業人としての自分にさまざまな迷いや悩みを抱えながらも、懸命に子育てをする保護者の姿が映し出されているように感じます。

図1では、ライフキャリアの主な役割である「親」「家庭人」「職業人」「個人」にどのくらいの比重が置かれているか、「理想」と「現実」について聞いています。

母親は「親」「家庭人」への現実の重みが理想より高い傾向にあり、特に無職母親にそれは顕著なようです。やはり母親が、親や家庭人としての役割をより担っている現実がうかがえます。

一方、父親は「職業人」の重みにおいて、理想と現実の差が大きい傾向があるようです。特に、配偶者である母親が無職の場合にその傾向が顕著で、父親１人が稼ぎ手である場合、職業人としての役割を担うことになる現実が見られます。

また、母親・父親の実際の子育て分担について尋ねたのが図2です。結果は無職母親の約７割、正規職母親でも４割以上が、子育ての「８～10割」を担っていると答えました。一方、正規職父親では５割強が「０～３割」、３割強が「４～５割」と答えています。

正規職の母親・父親の比較でも、実際の分担は母親がより担っているようです（母親・父親の平均労働時間の違いは1時間程度）。なお、この傾向は、家事の分担についても同様で、乳幼児のいる家庭の家事・子育ては、やはり母親に偏っている現実が見てとれます。

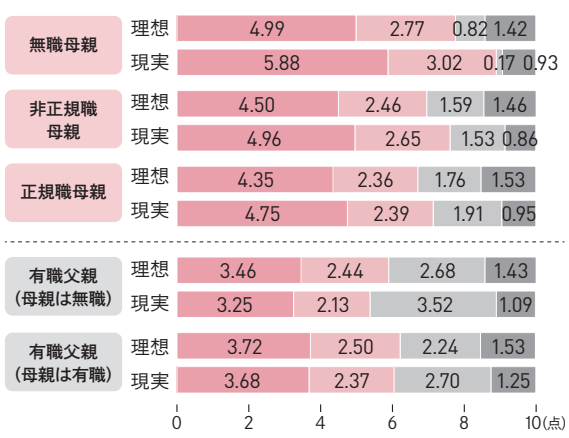
「乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査」調査概要

調査の実施者：ベネッセ教育総合研究所
調査のテーマ：未就学児の第一子をもつ保護者のライフキャリアや子育てに関する意識・実態
調査項目：ライフキャリア（親／家庭人／職業人／個人としての各役割）についての理想と現実・満足度、平日・休日の時間の使い方、子ども観、仕事観、性別役割分業意識、子育て観、主観的幸福感、家事・子育ての分担比率、悩み・困りごと、信頼する情報源、地域での子どもを通じた関係、子育て支援に対する期待など
調査地域：全国
調査方法：インターネットによるアンケート調査
調査対象：0歳～6歳（未就学児）の第一子をもつ母親（2,891人）・父親（2,891人）※夫婦ペアデータではない
調査時期：2023年3月

■ベネッセ教育総合研究所「乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査」ウェブサイト
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5882
アクセス方法：ベネッセ教育総合研究所サイト TOP ページ ＞ 研究所について ＞ 乳幼児・子育て研究 ＞ 調査・研究データ ＞ 乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査

親・家庭人の現実が理想を上回る母親、職業人の現実が理想を上回る父親

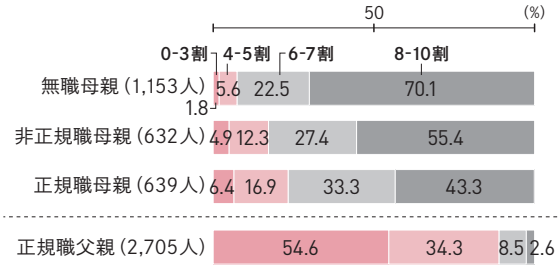
図1 ライフキャリアにおける4つの役割意識（重み）の平均値（父母別・職業の有無別）



無職母親：本人の職業について、調査時点で「無職（専業主婦／主夫等）」と回答した人（1,153人）
非正規職母親：本人の職業について、調査時点で「パートタイム・アルバイト」、「契約社員・嘱託」、「派遣社員」と回答した人（632人）
正規職母親：本人の職業について、調査時点で「正社員・正職員」と回答した人（639人）
有職父親（母親は無職）：有職の父親の内、母親（妻）が無職である人（566人）
有職父親（母親は有職）：有職の父親の内、母親（妻）が有職である人（2,053人）
※母親・父親とも「休職中」は、「有職」「無職」いずれにも含まない。

就業状況にかかわらず、子育てをより分担しているのは母親

図2 子育ての分担（父母別・就業状況別）



母親・父親ともに悩みは自分のための時間の確保

母親・父親の子育てやキャリアに関する悩みについて聞いたところ（P18. 図3）、いずれも第1位（「よくある」「時々ある」の合計）」は、「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」でした。図示はしていませんが、母親の就業状況別に詳しく見ても、同様に大きな悩みとして挙がっています。母親・父親ともに親・家庭人役割、もしくは職業人役割を中心的に担う中で、自分のための時間は二の次になってしまっているようです。

母親の悩みの第2位は、「子どもと長く一緒にいることで疲れることがある」です。また、母親の就業状況別に比較すると（図示なし）、この悩みは無職母親が高い結果となりました。それぞれに状況は異なるでしょうが、預かってくれる人や施設の存在などの要因も関連しているかもしれません。

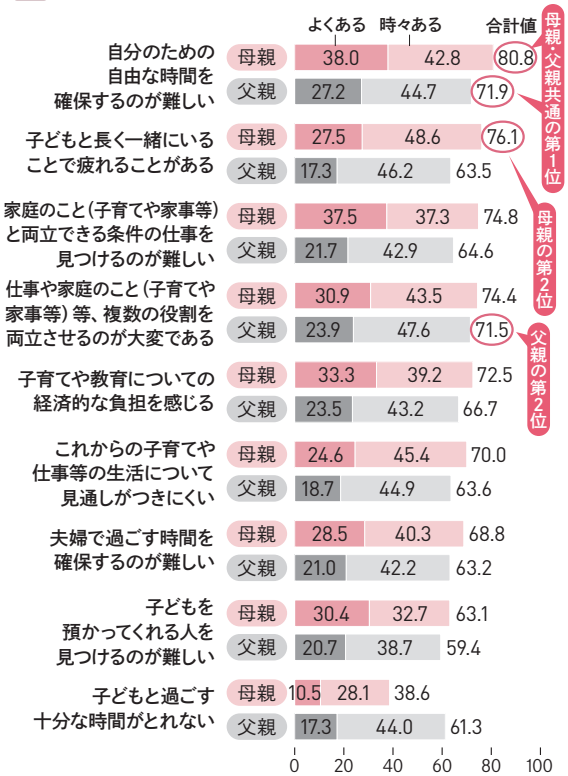
父親の悩みの第2位は、「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である」でした。こちらも母親について就業状況別に比較すると（図示なし）、有職母親が高い結果となっており、母親・父親にかかわらず仕事を抱える故の悩みであることがうかがえます。

その他、母親の就業状況別に差があった項目のうち、無職母親が高かったのは「子どもを預かっ

てくれる人を見つけるのが難しい」「家庭のこと（子育てや家事等）と両立できる条件の仕事を見つけるのが難しい」「これからの子育てや仕事等の生活について見通しがつきにくい」で、逆に有職母親が高かったのは、「子どもと過ごす十分な時間がとれない」でした。

母親・父親ともに、子育てやキャリアに関する悩みの第1位は「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」

図3 子育てやキャリアに関する悩み（父母別）



※母親・父親それぞれの上位の組み合わせを母親の合計値の降順に図示。

性別役割観、子育て観に表れる母親・父親の複雑な思い

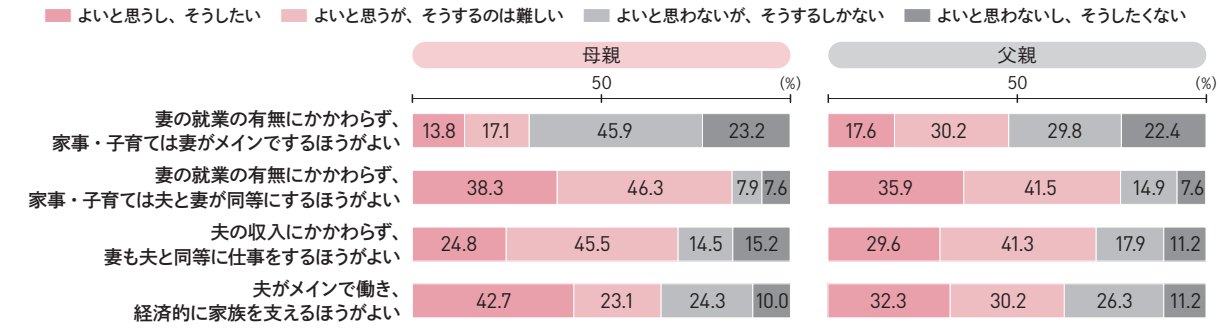
図4では、性別による役割観を聞きました。注目したいのは、「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては夫と妻が同等にするほうがよい」に「よいと思う」（「よいと思うし、そうしたい」「よいと思うが、そうするのは難しい」の合計）と肯定的な回答をした割合が、母親・父親ともに約8割に上ったことです。その一方で、「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては妻がメインでするほうがよい」には、現実はさておき、父親の肯定と否定（「よいと思う」と「よいと思わない」）が約半分ずつとなり、同等な分担にさまざまな思いがあることをうかがわせる結果となりました。家事・子育ての同等な分担が好ましいというイメージがある一方で、現実にはそうすることに難しさを感じているようです。母親・父親の意識に加え、職場の理解なども必要でしょうし、実際に同等な分担をと思っても、周囲からの肯定的、かつ温かいまなざしが得られにくいのかもしれません。

ただ、「夫の収入にかかわらず、妻も夫と同等に仕事をするほうがよい」にも、母親・父親ともに約7割が「よいと思う」と答えていることを踏まえると、夫は働き、妻は家事・子育てという性別役割観からは、変化している様子がうかがえます。

興味深いのが、「夫がメインで働き、経済的に家族を支えるほうがよい」に対して、4割強の母親が「よいと思うし、そうしたい」と積極的に肯

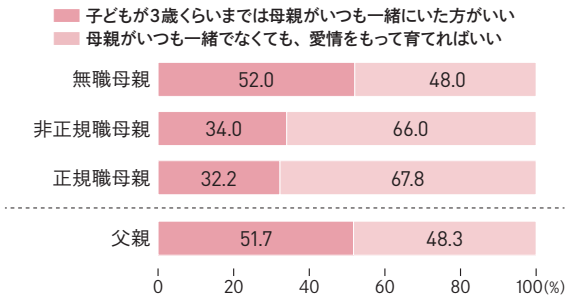
夫は働き、妻は家事・子育てという性別役割。多くの父母が否定しつつも、受け入れざるをえない面も

図4 性別役割観（父母別）



「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」。父親・無職母親と比較して、有職母親にその傾向が強い

図5 子育て観　3歳児神話（父母別、就業状況別）



定しており、父親と比べても高い傾向にあることです。家事や子育ての同等な分担を願いながらも、将来への見通しをもちにくい中で、家計は主に夫に支えてもらいたいというのが、母親の本音なのかもしれません。

子育てに関する考え方を聞いたのが図5です。子どもと一緒にいた方がいいと考えるかを尋ねたところ、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」と答えた有職母親は非正規職・正規職ともに７割近く、無職母親は５割弱という結果でした。

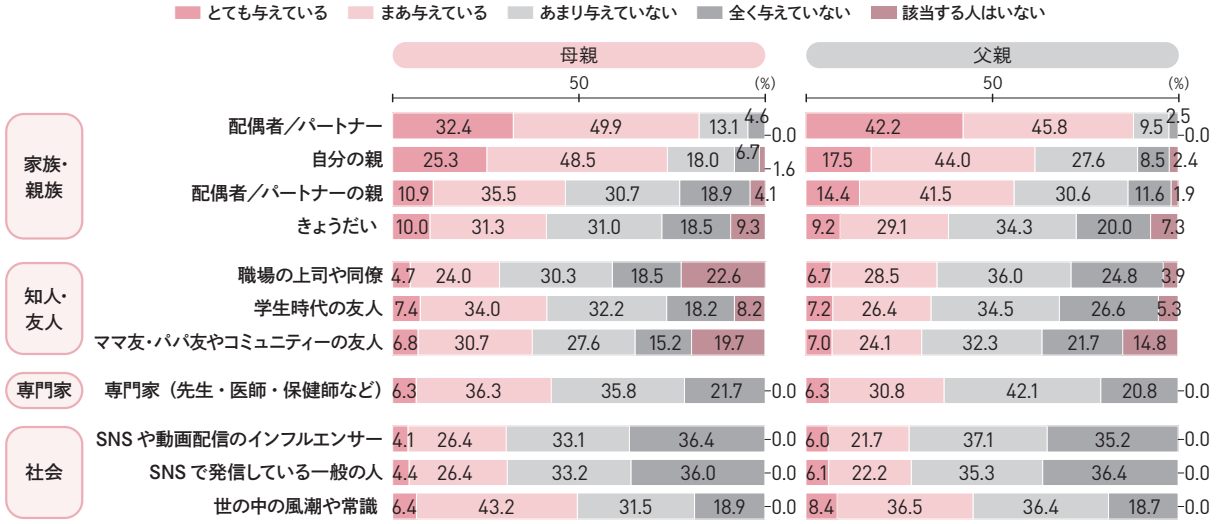
一方で、有職母親の３割以上が「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と考えながらも就業していますし、無職母親も「母親がいつも一緒」である方がいいと考える人ばかりではありません。つまり、ライフキャリアの視点から捉えると、子育てと就業の状況はなかなか一筋縄ではいかず、さまざまな気持ちを抱きながらであるというのも現実でしょう。今回は、母親の就業状況による分析結果となっていますが、このように保護者の置かれた状況やその思いは多様であることを、改めて、乳幼児期の子育てを支えてくださっている保育者のみなさんとも共有しておきたいと思います。

母親・父親は互いの価値観に影響を与え合う

図6では、母親・父親の子育て観、仕事観、性別役割観などの価値観にどんな人・環境が影響を与えているかを尋ねています。母親・父親ともに「配偶者／パートナー」の影響がもっとも大きく、「とても与えている」「まあ与えている」の合計が８割を超えました。「自分の親」が次に続き、母親にその傾向がより見られるようです。また、ママ友・パパ友がいない母親・父親も一定数いることから、

価値観にもっとも影響を与えるのは「配偶者／パートナー」。また「世の中の風潮や常識」の影響も大きい

図6 価値観に影響を与えている人・環境（父母別）



※「その他」は省略。　※このグラフのみ「母親」の回答には「休職中」「無職」が含まれる（全体の 54.2％）。

価値観の形成は夫婦や親子といった家族の影響が相対的に大きいことが見てとれます。

同時に注目したいのは、自分の価値観に影響を与えるものとして「世の中の風潮や常識」を挙げる母親が５割近くに上り、「専門家（先生・医師・保健師など）」よりも多いこと、一方で、ＳＮＳなどの影響は３割程度にとどまっていることです。家事や仕事などの役立ち情報を手軽に入手できるという点で、ＳＮＳは便利なツールですが、子育て中の母親･父親の意識への影響という点では、「世の中の風潮や常識」といったなんとなく感じる世間の目やメッセージの影響が大きいようです。子育て世代に対する温かなまなざしや柔軟な視点が社会全体に求められているといえるでしょう。

子育ての情報源として信頼されている園の先生

子育てや教育の情報源を尋ねたところ、母親は「園（保育園、幼稚園、認定こども園など）の先生」「医師や看護師、助産師、保健師」「あなたの親族（親やきょうだい）」の順に高い信頼を寄せていました（図7）。父親も「配偶者／パートナー」に次いで「園の先生」を挙げており、園の先生の情報に対する信頼の高さが明らかになりました。別の調査でも「保護者と保育者との日々の会話の頻度は、保育者への

母親として振り返る保育者という存在

手探りだった私を肯定してくれた園の先生方

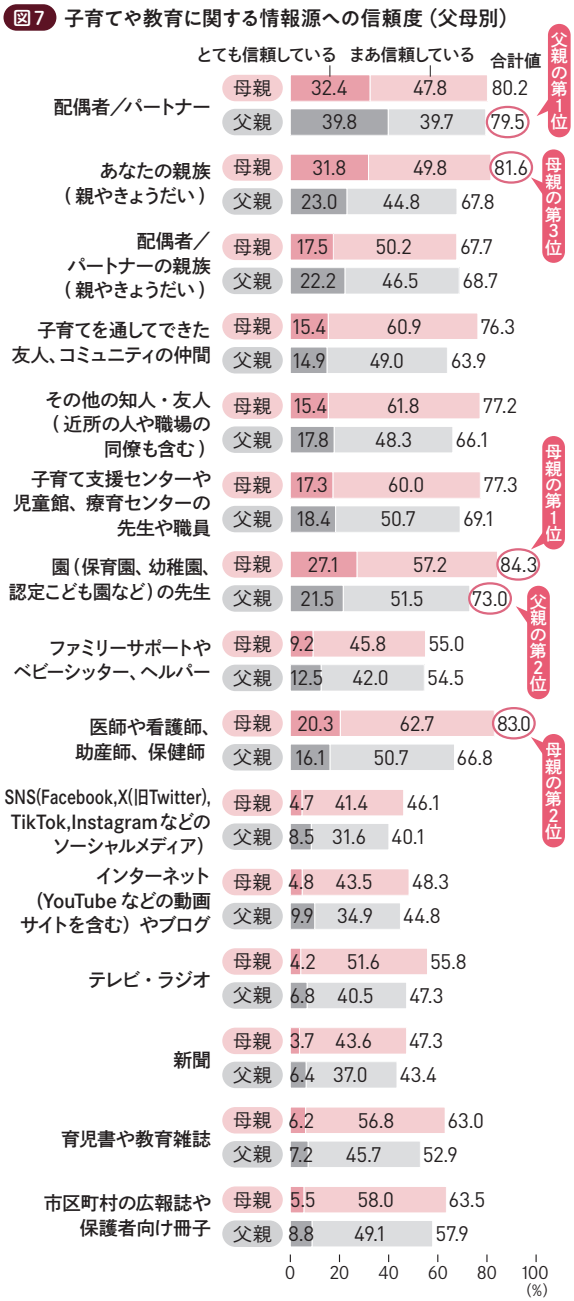
わが家の子どもたちも、保育園には本当にお世話になりました。特に第一子のときは、毎朝泣く息子に「こんな思いをさせてまで……」と自分も泣きたくなったり、街で同年代の子どもを連れているお母さんたちの姿を直視できず、「子どもに時間をもらっているのだから仕事も頑張らなければ」と自分を追い込んでしまったり。迷ったり悩んだりの日々だったことを思い出します。

そんなとき、園の先生に「私たちが見ているから大丈夫」「今日は園でお子さんにこんな素敵なことがあったよ」と声をかけていただいたこと、閉園ぎりぎりのお迎えにも「お母さん、お仕事頑張っているね」とさりげなくも温かい言葉をかけていただいたことで、どれだけホッとして支えられたか……。その光景も覚えています。ただ、そのときは自分に余裕がなく、感謝の気持ちを言葉にすることはなかなかできなかった気がします。

そんな自分を振り返ると、子育て真っ最中の方々も園の先生方に支えられ、そのありがたさを実感しつつも言葉にできるのは少し先、ということもあるかもしれません。子どもたちが成人した今、改めてあの頃を思い出すと、感謝の気持ちをその場でお伝えできていたら……。かつての乳幼児の親からの率直な気持ちです。

子育てや教育に関する情報の信頼が高いのは「配偶者／パートナー」や「園の先生」

図7 子育てや教育に関する情報源への信頼度（父母別）



※「とても信頼している」「まあ信頼している」「あまり信頼していない」「まったく信頼していない」「情報を得ることはない」のうち、「情報を得ることはない」を除き、「とても信頼している」、「まあ信頼している」の％。

信頼感と関連する」という指摘もあり、保護者にとって園の先生の存在が大きいことを感じます。

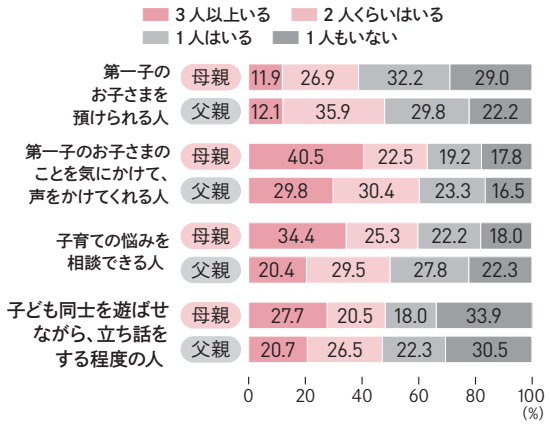
また、どの情報源も、父親より母親の信頼のほうが高い傾向が見られました。母親のほうが情報を得ることに積極的で、父親は母親から情報を得るという実態も垣間見えます。

地域における子どもを通じた付き合いについても触れたいと思います（図8）。地域に「子どもを預けられる人」が１人もいない母親が約３割、「子ども同士を遊ばせながら、立ち話をする程度の人」が１人もいない母親・父親が３割を超えています。

ここに図示されていませんが、「子どものことを気にかけて声をかけてくれる人や悩みを相談できる人の多さと、母親の主観的幸福感の高さには関連がある」という結果が示されています。子育て中の保護者が、こうした人と地域でつながりをもてることの意味は大きいといえるでしょう。園は、子どもを取り巻くさまざまな人との出会いを育みやすい場でもあります。実際に、子どもとその保護者に加え、地域の多世代の人々をつなげようと、場を提供しながら取り組んでいる園もあります。日々の保育だけでも忙しい先生方にこれ以上求めてよいかという気持ちも抱きつつ、園と地域のつながりは、子育て世代を含めたよい循環のきっかけになるのではないかと考えています。

「地域の中で子どもを預けられる人」が１人もいない母親が約３割

図8 地域における子どもを通じた付き合い（父母別）



母親として振り返る夫という存在

子育て支援の利用にはパートナーの価値観も

仕事と子育ての両立には、パートナーとの関係もかかわることが研究の知見から示されており、自分の体験でも夫の理解が重要だったと思います。私は地域のファミリーサポートやシルバー人材センターなど、良心的な費用で頼める方々の力をずいぶんお借りしましたが、夫に「他人を家に入れないで」などと強く主張されていたら、身近な子育て支援サービスの利用が難しくなったでしょうし、就業継続にも影響があったでしょう。

今回の調査でも、母親･父親の価値観に「配偶者／パートナー」や「自分の親」の影響が小さくないことが示されました。母親・父親にとって身近な人からの理解や応援はありがたく、かつ大切だと感じています。

園の先生方へ

温かく肯定的な見守りのありがたさ

「保育者」は、保護者にとって頼りになる心強い存在です。先生方とのなにげないやり取りや連絡帳に書かれた子どもの姿などを通して、安心感や親としての自信をもてるだけでなく、先生方に対する信頼感も深まります。

特に先生方から子どもの肯定的な姿や成長の様子を伝えてもらうと、保護者はうれしさを感じるとともに子どもへのまなざしも変化していきます。先生方が、日々の保育の中で発見した子どもの素敵な姿を保護者に積極的に伝えるだけでも、園からの帰り道の会話や、その後の家庭での時間にちょっとした変化をもたらすのです。ささやかなことに思えるかもしれませんが、実は大きな子育て支援です。

そして、先生方の温かなまなざしや肯定的な言葉かけは、子育てのロールモデルを示すことにもなります。親子の“今”を支えてくださっている日々の保育は、子どもと親の“未来”にもしっかりつながっていく本当にありがたい営みだと、改めて感じています。

刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの幼児教育」バックナンバー

2023 冬 | 特集 | 保育者のメンタルヘルスを考える

2023 春 | 特集 | 子どもを真ん中にして　数字をもとに考える幼児教育

2022 冬 | 特集 | 「しくみ」で積み上げ、質を高める幼保小接続

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

◎WEBサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードいただけます。

ベネッセ　これからの幼児教育　検索

https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/

「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口
〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17　TEL.0120-926-610（通話料無料）　受付時間／9:00～18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかけください（ただし通話料がかかります）。

これからの幼児教育　2024 Spring
2024年3月31日発行　編集発行人 野澤雄樹　発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2024
4PL056-01